

社会科学学習指導案

指導者

日時 令和4年11月19日(土)

年組 中学校 第3学年

場所 中学校教室

題材 グローバル経済と金融

題材について

本題材は、中学校学習指導要領（平成29年告示）社会科 公民的分野 B 私たちと経済（1）市場の動きと経済に重点を置いて指導を行う。特に「円安・円高の影響」については、私たちの日常生活と密接な関係がありながら、生徒が実際に「為替相場」を実感することが皆無に等しく、概念の習得が容易ではないため、知識・理解だけにとどまる場面が多く見受けられる。しかしながら世界的な新型コロナウイルスの流行やロシアによるウクライナ侵攻、また日本とアメリカの金融政策の違いなど、複合的な要因によって、2016～2021年の期間は1ドル＝約120円前後で推移していた為替相場が、令和4年9月末現在、1ドル＝約150円に迫っている。その結果、今年に入り食品や衛生用品、光熱費が相次いで値上げされ、私たちの家計に大きな影響を与えている。そのため、各種メディアにおいて「円安」の報道が連日のようになされているが、一方で海外市場をメインとする日本企業が、過去最高の営業利益をあげている例もある。このように「為替相場」の変動は、立場によって「理想の円相場」が変わることから、現在進行形の社会的事象を多面的・多角的に考察し、考えを深めることができる題材だと考える。

授業では、立場によって変わる理想の円相場について考察する時間と、総合的に考えて1ドルは何円が理想的なのかについて考察する時間を設ける。このような段階を経ることで、教材研究の追体験をするとともに、生徒が学習した内容と実生活が結びつきやすくすることを意図としている。

本学級の生徒は、社会的事象への関心が高いだけでなく、ペアワークやグループワーク、ディベートなど協働的な学習を得意としている。そのため、「新しい人権」の単元では、『尊厳死と臓器提供、出生前診断について、複数の立場で結論を出し、自己と他者で年齢が異なる事で違う結果になったのはなぜか?』ということを議論し、「行政を監視する国会」および「行政の仕組みと内閣」の単元では、『民主主義を守るために三権分立や議院内閣制の仕組みが取り入れられているが、野党が小規模な党の集まりの場合には、本当の機能を発揮できないのではないか?』という結論にまで至ることができた。これは、偶然にもメンタリティーや価値観が似ている生徒が集まったため、表現活動が円滑に行われやすいことに起因しているからと考える。この傾向は社会科の授業以外でも、道徳や学活の場面で多く見受けられる。一方で意図的に偏ったものの見方や考え方をすることがあまりないため、自己完結しやすい傾向にあり、この単元を通して異なる極論から自分の考えにスコープする力を身に付けさせたいと考える。

指導にあたっては、前時の段階で「円高ドル安」や「円安ドル高」や「為替相場が変動する仕組み」などのインプットを予め行い、「1ドル＝100円が120円になったが、これは円高ではないのか?」という誤認識や「輸出・輸入や海外旅行に行く・海外から来る場合には、どのような為替相場の状態が有利なのか?」についての確認を終えたうえで、本時の本題である「立場によって変わる理想の円相場 ～1ドル何円が理想的?～」に迫りたいと考える。そこから「円安のみならず円高も極端な場合にはメリットやデメリットが生じる」ということを理解させたい。

指導目標

- ・ 人や商品が国境を越える場合に、「円安ドル高」や「円高ドル安」が与える影響について理解をしたうえで、立場によって経済的な利益または損失が生じるかを考えると共に、利益の出る場合でも「持続可能なものであるか」考察できるようにする。
- ・ 自分の定めた立場から、最も理想的な為替相場を発見し、他者にわかりやすく説明できるようにするとともに、他者の意見から自分の意見を洗練することができるようにする。
- ・ 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したり、それらを基に議論したりしようとする態度を養う。

指導計画（全7時間）

次	時	学習内容
1	1	市場経済の決まり方（市場経済とは 需要・供給と価格の関係）
2	2	価格の働き（市場経済における価格の動き 独占価格 公共料金）
3	3	貨幣の役割と金融（貨幣の役割 お金の貸し借りと金融 金融の方法と働き）
4	4	私たちの生活と金融機関（銀行の仕組みと働き 預金通貨 日本銀行の役割）
5	5	景気と金融政策（景気とは 戦後の日本経済 日本銀行の金融政策）
6	6	グローバル経済と金融 （貿易と経済のグローバル化 為替相場 グローバル経済と金融）
7	7	立場によって変わる理想の円相場～1ドル何円が理想的？～ 本時

本時の目標

立場によって理想とする為替相場が違うことをふまえて、総合的に考えて1ドル＝何円なのか？を工夫して表現することができる。【知識・技能】

「教科等本来の魅力に迫るための教員の資質・能力」との関連

「円安」や「円高」には、それぞれ利益や損失の両面を招くことがあることを理解するために、現在の円相場だけでなく、「日本の食糧自給率の変化」や「主な国のエネルギー自給率」、「日本の人口の移り変わり」や「日本で暮らす外国人」、「外国人観光客（インバウンド）」がわかる資料を導入で取り入れた。これらの資料を基に考えることで、「円安も問題だが円高も問題ではないか？」、「日本にとっては円安や円高が好ましい場合と好ましくない場合があるのではないか？」という課題を、生徒が捉えやすいのではないかと考えた。【授業構想力】導入によって、1995年と2022年現在の円相場の平均である「1ドル＝約120～122円」が理想的な数値ではないかと仮説を立てやすくする。【授業構想力】「1ドル＝約120～122円」の場合に、利益を生む場合と損失を招く場合の資料を複数提示し、生徒一人ひとりが理想的な為替相場を考察し表現する。そこに貿易相手国や持続可能性という要素を含んで、総合的に判断してどの立場でも理想的な円相場を見いだす。【授業実践力】【授業分析・評価力】

学習の展開

学習活動と内容	○指導上の留意点（◆評価）
<p>1. パワーポイントをもとに「このようなめあてになった理由」を考える。</p> <p>2. 資源を輸入に依存し食糧自給率が低い日本は、円高が有利な場面があることに気付く。少子高齢化による人口減少や外国人観光客の増加、製品を輸出する際は、円安が有利な場面があることに気付く。</p>	<p>○ ペアで前時の内容について振り返りの場をもつ。</p> <p>○ 「円安・円高のメリット・デメリット」が理解できるように、資料を用意する。</p> <p>◆ 多面的・多角的に「円安」や「円高」について考察している。【知識・技能】</p>
<p>立場に応じた理想の円相場を決め、その理由を説明できる。</p>	
<p>3. 考えた円相場を、用紙に記入し黒板に貼る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最も円安な意見を聞き。 ・最も円高な意見を聞く。 ・価格をソートするように貼る。 <p>4. なぜ、理想的な円相場の金額をそのように定めたのか、全体交流する。</p> <p>5. 4の活動を踏まえて、理想的な円相場の金額を考える。</p> <p>6. まとめとして、今後の円相場の予想と、「良い円安」・「悪い円安」があることについて理解する。</p>	<p>○ 視覚的に情報が入りやすいように、用紙を黒板に貼るように促す。</p> <p>○ 多面的・多角的に思考・判断させる。</p> <p>◆立場によって理想とする為替相場が違うことを踏まえ、1ドル＝何円なのか？を工夫して表現することができる。【知識・技能】</p> <p>◆総合的に1ドル＝何円が理想的なのか？を工夫して表現することができる。【知識・技能】</p> <p>○円高・円安のどちらが良いのか？など、評価については、教員が意見を押しつけない。</p>

生徒が考えた理想の円相場と立場の例（円安から円高の順）

① 1ドル＝180円 立場は「外国人観光客をターゲットとするホテル」

外国人観光客向けのとなると、食事に関しては日本の食材を使うため、輸入に頼る必要がなく、極端な円安になっても問題ないと考え。また、円安の時にはドル高となるため、外国人観光客にとっては訪日しやすくなるというメリットもあり、更なる観光客の需要を見込むことができる。

② 1ドル＝160円 立場は「外国人観光客」

外国人観光客からの立場で考えると、円安であるほうが良いと考えこの円相場を設定した。特に日本で買い物をする場合には、外国人観光客からすれば安く感じ、日本製の高品質な商品が多く売れるため、人口減少で市場規模が縮小する日本にとってもメリットがある。

③ 1ドル=120円 立場は「製品をアメリカへ多く輸出する会社の社員」

製品を海外に輸出する際に、例えば1ドル=80円といった円高の場合には、現地で商品価格が高くなるため売れる見込みが持てないが、円安傾向に行けば行くほど、海外での価格競争に強いため、人口が減少し市場規模が縮小している日本の経済を支えることができると考えたため。

④ 1ドル=120円 立場は「自動車製造業」

ある日本の自動車製造メーカーの為替相場に対する考え方を調べてみると、心地よい円安は1ドル=110円、危険な円安は1ドル=130円となっていた。この業界の場合、資源の輸入のためには円高寄りが有利であるが、商品の輸出のためには円安寄りが有利であるといえる。そのため、平均の1ドル=120円とした。

⑤ 1ドル=114円 立場は「石油の輸入を優先」

1ドル=114円は過去の円相場の平均から導き出した。それは円高寄りになると石油の価格は下がるが、輸出の面では不利になり、円安寄りになるとその逆になるため、中間をとってこの為替相場になった。

⑥ 1ドル=105円 立場は「日本企業に勤め、海外駐在をしている人」

給与が日本円で支払われた場合、現地での生活のために日本円を外国の通貨に換える必要があり、その場合に円高寄りである方が多くの収入を得ることができるが、再度、日本円に換える際に大きな損をしないくらいの円高が望ましいと考え、このような為替相場となった。

⑦ 1ドル=100円 立場は「消費者」

生きるために必要な食料品を安く購入できるため、数年前の平均レートでの1ドル=110円より少し円高に設定した。海外からの輸入品を比較的安く購入することができると共に、農林水産業のうち、施設園芸農業や輸送園芸農業ではガソリンや石油を必要とするため、これらを安く輸入できることで、商品価格への影響も少ないと考える。

⑧ 1ドル=94円 立場は「輸入」

日本は多くの資源や食糧を輸入に頼っている。そのため海外で紛争や戦争などが発生した場合に、国内で資源や食糧を確保することが難しくなってくる。加工貿易で商品を輸出しなければ経済が成り立たないこともわかるが、そもそもの資源がなければ何も生産できないことから、円高寄りの為替相場を設定した。

⑨ 1ドル=1円に近い方が良い 立場は「アメリカで心臓移植を希望する関係者」

1ドル=1円に近い方が良いは極端な考え方ということは理解しているが、アメリカで心臓移植を受けるには約3億円必要であるということをニュースで見つけた。最近では募金よりも早く資金を集めることのできるクラウドファンディングも広まりつつあるが、1日でも早い心臓移植を考える時、このような為替相場となった。

授業後の考察

これまで「グローバル経済と金融」の単元では、「円高」や「円安」ということばに対して、為替相場が反対に動くことから、内容理解に苦しむ生徒が多かった。そのため「円高」や「円安」の基本的な意味や、それぞれが持つメリットやデメリットを押さえるだけにとどまる場合が多かった。特に生徒にとっては、耳なじみのあることばであるが、実生活のなかで実感することが少なかったように思う。

本年度は急速な円安が進行し、生徒にとって身近な商品にも値上げの波が押し寄せ、本単元を学習するためには良い機会であったように思う。その際に、「1ドル=何円であればいいのだろう？」という生徒が感じた疑問を、中心発問に設定したことで生徒は学びやすくなったように感じる。更にこの中心発問はシンプルな表現ながら、100%正しいと言える明確な答えがなく、立場によって理想の為替相場が変わることから、多面的・多角的に考察する必要がある内容となった。

また、急激な円安の進行が問題なのは理解できるが、日本は加工貿易に依存し、人口減少や市場規模の縮小という問題を抱えているため、やや円安寄りの1ドル=120円前後に為替相場を設定する生徒が多かった。ジレンマ型授業の実践にも繋がったと推測できる。今後もこのような発問の設定を意識した授業づくりや教材研究をおこなっていきたいと考える。

課題としては、実生活で経験したことと、データを結びつけて為替相場を設定しておらず、教科書の1ドル=100円を基準にした例を「円高と円安の中間」として捉えた生徒がいたことである。思考・判断・表現に結びつきやすい資料の準備が必要であると痛感した。